



きらつと教育

今回からは、3回シリーズで、「児童養護施設における予防教育法の観点からのアウトドア考察」を紹介します。

ドン・ボスコの提唱した予防教育法の観点から考察すると、アウトドアは、「グラウンド・コミュニケーション」に相当する。教室では、教壇から生徒に接し、教師は生徒の上に位置しているが、グラウンドでは両者は同位置にあり、親密な交わりが可能となる。

結論から言うと、予防教育法によるアウトドアは、先生と子どもたちとの信頼関係を築くための重要な一方法と言えよう。

ドン・ボスコの言葉から、私なりにサレジオ会的なアウトドアを考えてみたいと思う。

その1：「愛情なければ信頼なく、信頼なければ教育なし」

ドン・ボスコは青少年教育のために神に奉献したカトリック司祭であるから、その教育の根底に神の愛が存するのは当然である。ドン・ボスコは青少年を愛し、善へと導いていくための教育活動に自分の生涯を賭けた。

教育者の、子どもたちに対する愛情によって築かれた、教育者と子どもたちとの間の「信頼関係」なしには教育が成立しないということであった。教育者の言葉が、生きたものとなって子どもたちの心に届くのも、この信頼関係があつてのことである。

このことは母子間に存する基本的信頼関係に喩えることができよう。母親には自分の子どもに対しての絶対的な愛があり、子どももその愛を疑うことがなく、母親から子どもへの教育が可能となっていく。

ここで、私が触れたいと思っていることは、この、母と子の基本的信頼関係（アタッチメント）についてである。児童養護施設に入所している子どもたちの場合、このアタッチメントが形成されていないか、あるいは虐待などによってむしろ負の部分形成されているケースが多い。したがって、児童養護施設の子どもたちには、このアタッチメント形成が大きな課題となるので、そのための一手段としてアウトドアを考えていく必要性は大きい。アウトドアそのものの価値や意義などたくさんあるであろう。しかし、児童養護施設におけるアウトドアの意義は「教育者と子どもたちとの信頼関係を築くこと」、アタッチメントの形成にあることを銘記しておきたい。

日常生活においては、しなければならないことをさせるため、どうしてもアシステンテ（監督者のサレジオ的表現）から子どもたちへの要求や叱責も多くなりがちである。しかし、いったん日常生活から解放されれば、楽しい生活、たとえそれがハードなものであっても、アシステンテと共に頑張ることの喜びを感じさせるようにしていかなければならない。その喜びは、アシステンテと子どもたちとの信頼関係に比例してくるものである。

（シスターS.K.）